

バングラデシュ独立戦争研究の現在

——記憶の継承と学術的意義——

村山真弓

2018年3月26日、バングラデシュは47回目の独立記念日を迎える。戦争を知らない世代が人口の約8割を占めるようになったバングラデシュでも、戦争の記憶をどう伝えるかは極めて重要な課題である。

●独立戦争の遺産

独立戦争時にパキスタンの側に立ち、独立支持派や異教徒（ヒンドゥー教徒）の殺害に加担した人々を裁く戦犯裁判所は、2009年によく設置された。しかし実際に刑が確定ないしは執行されたのは11人のみで、現在の政治対立も絡んで、戦争は、バングラデシュの政治と社会に生きた遺産として、大きな影響を及ぼしている。貧困国から新・新興国へとバングラデシュへの経済的評価が変わる一方で、社会に存在する暴力の問題は根深く、その根は独立戦争にまで遡る。

本稿では、独立戦争研究の最近の成果を何点か紹介するが、取り上げるのは英語および日本語のものに限る。外国人による、あるいはベンガル語を解さない読者を想定した研究・記録が、何を問題とし、何を明らかにしたのかを素描したい。

最初に、独立戦争のあらましを簡単に述べておこう。1947年のインド・パキスタン分離独立によって、統一パキスタンは、民族も言語も異なり地理的にも1600キロも離れた地域が、イスラームという宗教のみを紐帯として生まれた。その分裂の兆しは、建国時から芽生えていたともいえるが、崩壊へのカウントダウンは、1970年末の初の成人普通選挙として実施された国会選挙からである。ムジブル・ラフマン（ムジブ）を代表に掲げるアワミ連盟が過半数を獲得し第1党となったにもかかわらず、第2党の西パキスタンを基盤とするパキスタン人民党を代表するズルフィカール・アリー・ブットーは、ムジブの首相就任に反対し、東西パキスタン両方に州首相を置く案を提案した。これ

を受けて、当時の最高権力者ヤヒヤ・カーン大統領・陸軍総参謀長は1971年3月1日、国会招集の無期限延期を発表した。翌日以後の東パキスタンでは、ゼネスト、抗議デモが連日行われ、一気に独立への機運が高まっていた。各地で軍とデモ隊の衝突が発生し、死者の数が増加するなか、ヤヒヤ大統領とムジブの交渉も打開策をみいだせず、3月25日深夜、軍による独立支持勢力の弾圧「オペレーション・サーチライト」作戦が決行される。ムジブは同日夜逮捕された。学生や市民らの多くが、正規軍からの脱走兵らとともに解放軍を結成し、インドの支援を受けて、全国で西パキスタン軍に抵抗を続けた。隣国インドには1000万人ともいわれる難民が押し寄せていたが、12月3日、インドは正式に参戦し、1947年、1965年に次ぐ第3次印パ戦争に発展した。12月16日、パキスタン軍は全面降伏した。

●誰の記憶を継承するのか

独立戦争に参戦した立場からの記録は多いが、参考文献①は、終戦を西パキスタンで迎えたベンガル人の、西パキスタン脱出の記憶である。パキスタンに取り残されたベンガル人は約40万人といわれるが、この著者は、何とかアフガニスタン・インド経由で帰国を果たした。しかし残留ベンガル人の多くは、とりわけ若い女性達は過酷な経験をしたと伝えられる。あらゆる人々が異なる経験を持つ戦争だが、女性に焦点を当てた文献②は、インド・アッサム州出身で、米国の大学で教鞭をとる著者による研究である。

参考文献③の著者シャルミラ・ボースも、インド出身のベンガル人で、現在は欧米で活躍している。日本でも有名なスバス・チャンドラ・ボースは彼女の大叔父にあたる。本のタイトルが示すように、同書もまた戦争の「記憶」を拾い集めたものである。しかしボースの中心的主張は、これまでの1971年戦争に関する記

録が、両国どちらかの立場に偏った党派的神話で構成されているというものである。バングラデシュもパキスタンも、ともに相手の主張を否定するが、その否定の度合いはバングラデシュの側により大きいとボースは述べる。バングラデシュ人は自分たちを被害者として描くが、非ベンガル人に対する、ベンガル人による暴力も決して小さくなかったことを、ボースは両国の関係者への聞き取りと資料の精査によって明らかにする。また、被害者としてのベンガル人という意識が、その後の独立戦争支持者たちによる暴力の正当化につながる傾向を生んでいると述べる。

●政治・外交研究として

同じインド人研究者スリナート・ラガヴァンによる参考文献④は、既存研究について、適切な距離感と良質な資料利用の欠如を指摘する。その理由は、南アジアの歴史家が1947年を超えようとせず、また過去20年の学問的趨勢が文化・社会史中心となり、政治・外交史が脇に追いやられてきたためだとする。ラガヴァンは、バングラデシュ独立は西パキスタンによる政治的、経済的、文化的差別の必然的帰結という通説を否定し、より広い文脈で、国内、地域、国際の相互関係からパキスタン崩壊を再考する。世界各地の主要な公文書館資料を駆使して書かれたラガヴァンの主張は説得的であるが、解放軍の役割の検討が欠如している等の批判が、バングラデシュの研究者から出されている。

さて、米国はパキスタン政府に対して大きな経済的・軍事的支援を行っていたが、独立戦争時における同国の姿勢は内外での強い批判にさらされた。当時、東パキスタンの米国総領事を務めたアーチャー・ブラッドは、1971年4月、西パキスタンによるベンガル人弾圧を前に沈黙している米国政府の対応を強く非難する公電を出した。ブラッド自身は、1998年末に当時交わされた公電の公開を待って回顧録を出した（参考文献⑤）。プリンストン大学のゲイリー・ベースによる『ブラッドの公電』と題する参考文献⑥は、ニクソン大統領とキッシンジャー国家安全保障問題担当大統領補佐官が、なぜヤヒヤ政権を支持し、バングラデシュで起きていた「ジェノサイド」に冷淡であったのかを、ホワイトハウスの録音記録などから再構築していく。

ところで、日本におけるバングラデシュ独立戦争研究だが、独立間もない時期に著された日本人研究者や



インド・メガラヤ州で訓練をうける解放軍戦士たち (Haroon Habib氏撮影)

援助関係者による幾つかの研究や記録、ならびにバングラデシュ人による日本の役割に関する研究がある。しかし外務省の公文書公開は遅れており、関係者の死去や高齢化の問題とともに、本格的な研究は重要かつ喫緊の課題である。日本は、米国に先立ち1971年2月には新生バングラデシュを承認したが、その過程で中心的役割を果たした故早川崇代議士が記した冊子『バングラデシュとの出会い』（1978年出版）が、2011年にベンガル語訳が、2015年には、参考文献⑦として復刻されている。

(むらやま まゆみ／アジア経済研究所 研究支援部)

《参考文献》

- ① Matin, Abdul, *A Passage to Freedom: The Story of an Adventurous Escape of a Bengali Family from Pakistani Captivity*, Dhaka: Adorn Publication, 2009.
- ② Saikia, Yasmin, *Women, War and the Making of Bangladesh*, New Delhi: Women Unlimited, 2011.
- ③ Bose, Sarmila, *Dead Reckoning: Memories of the 1971 Bangladesh War*, London: Hurst & Company, 2011.
- ④ Raghavan, Srinath, *1971: A Global History of the Creation of Bangladesh*, Cambridge: Harvard University Press, 2013.
- ⑤ Blood, Archer K., *The Cruel Birth of Bangladesh: Memoirs of an American Dipolmat*, Dhaka: The University Press, 2002.
- ⑥ Bass, Gary J., *The Blood Telegram: Nixon, Kissinger, and a Forgotten Genocide*, New York: Alfred A. Knopf, 2013.
- ⑦ 早川崇『復刻版 バングラデシュとの出会い——民族と国境をこえて——』早川鎮、2015年。